

チヨンソ
ソウル特別市立鍾路図書館



1984年11月、晩秋のソウルを訪れた。4年後のソウル・オリンピックにむけて、すべてが喧騒と熱気に包まれていた。めざす鍾路図書館は、繁華街から少しはずれた社稷公園（鍾路区社稷洞）の静かな丘の上に立っていた。正門を入るとすぐ右側に“韓国図書館の父”とよばれる李範昇先生の銅像が優しくほほえみかけていた。苛酷な日本の植民統治下で設立されて以来、この図書館が歩んできた苦闘の歴史を思い起こし、私はしばし胸の熱くなるのを禁じえなかった。

現在の機構は、館長以下庶務課（庶務、経理）司書課（収書、整理、書誌）閲覧課（閲覧、蔵書、参考）の3課8係制から成り、職員は約60名。一般閲覧室、参考閲覧室、逐次刊行物室、視聴覚室、人文社会科学室があり、席数710、蔵書数約14万冊。利用者は1日平均1,200人（成人は52%）で、どの部屋も真剣で熱心な関

覧者であふれていた。

鍾路図書館は、次の三点で韓国図書館史上重要な位置を占めている。

まず館史であるが、当館は韓国人によって創設された現存最古の図書館である。韓国には他に国立中央図書館（元朝鮮総督府図書館）、ソウル特別市立南山図書館（元京城府立図書館）、釜山直轄市立市民図書館（元釜山図書館）など有名な図書館があるが、すべて日本人の創立になるものであった。当館は『鍾路図書館六十年史』によれば、二人の偉大な社会運動家李範昇、尹益善によって1920年11月、京城図書館の名でパゴダ公園横に設立され、先駆的役割を果たした。その後、財政難で京城府に移管された悲運の時代、さらに解放後の混乱と朝鮮動乱をへて、新築移転し今日に至っている。

次に蔵書は、古書（2,869冊）と日本書（2万6千冊）に貴重なものが多く、興味をひかれる。とくに古書は、高麗時代、李朝時代の唯一本が多い。

第三は、鍾路図書館が韓国の公共図書館運動の中で果してきた先取性と革新性が注目される。主婦閲覧室と児童閲覧室（これは後に市立オリニ（児童）図書館として独立）の設置、自動車移動文庫の運営は韓国最初の試みであり、成功をおさめている。また最近では視覚障害者サービス（盲人図書室の設置、点字図書、録音テープの作成）を開始した。

現在鍾路図書館には、予算、人員、サービス面など多くの問題があると言う。しかし私は今回の訪問を通じ、親切で潑刺とした職員達に接し、着実に前進する韓国図書館界の一端にふれる思いがした。（経済社会課 宇治郷 毅）